

## 『ローマの信徒のみなさんへ』私訳 (Ⅳ) — 承前 —

阿 部 包

前号(第7号)に掲載した『ローマの信徒のみなさんへ』(Ⅲ)に続いて、その(Ⅳ)を掲載する。今回は12章から16章までであるが、今回で、結果的にパウロの遺言となった『ローマの信徒のみなさんへ』が完結する。内容的には、前章までの議論あるいは論証を終えたパウロが、ローマの信徒たちに向けて語った具体的な勧告が、その大部分を占めている。小見出しを列記すると次のとおりである。〈キリストの内にある新しい生活〉、〈キリスト者の生活指針〉、〈支配者への従順〉、〈律法を十全に満たす隣人愛〉、〈救いが近づいている〉、〈兄弟を裁いてはいけない〉、〈兄弟を躓かせてはいけない〉、〈自分ではなく隣人を喜ばせなさい〉、〈福音はユダヤ人と異邦人両方のため〉、〈パウロの宣教の使命〉、〈ローマ訪問の計画〉、〈個人的な挨拶〉、〈神への賛美〉。このうち、〈個人的な挨拶〉については、元来この手紙の本文であったことに疑義がある。最後の〈神への賛美〉は後代の追加である。なお、脚注は初回からの通し番号である。

### ローマの信徒のみなさんへ

#### 12

〈キリストの内にある新しい生活〉

1 こういうわけで、兄弟のみなさん、わたしはあなたがたに、神の憐れみをたよりにして勧めます。あなたがたの体を、神に喜ばれる、聖なる、生きたいけにえ<sup>259</sup>として献げなさい。これこそ、あなたがたの理にかなった礼拝<sup>260</sup>を(献げることです)。2 また、あなたがたはこの世に同化

してはいけません。むしろ、理性の刷新によって造り変えられて<sup>261</sup>、何が神の意志か、すなわち、何が善いこと、喜ばれること、完全なことであるかを、見分けられるようになりなさい。

3 わたしは、わたしに与えられた恵みによって、あなたがたの一人ひとりすべてに言います。思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。むしろ、各自に信仰の量りとして神が分け与えてくださった程度に応じて<sup>262</sup>、思いを働かせて思慮深くなりなさい。4 というのは、わたしたちの一つの体には多くの部分があっても、すべての部分が同じ働きをしているわけではないのと同じように、5 大勢であってもわたしたちはキリストにあって一つの体であり、一人一人は互いに部分だからです<sup>263</sup>。

<sup>259</sup> 「生きたいけにえ」は *thysian zōsan*。ユダヤ教や異教において献げられるいけにえが、殺された獣であることと対比している。

<sup>260</sup> 「理にかなった礼拝」は、*tēn logikēn latreiān*。「キリスト者としての理にかなった」の意味。*logikos* の訳としては、「霊的な」(青野訳、新改訳)も十分可能。他に「なすべき霊的な」(協会訳)、「なすべき」(新共同訳、本田訳)、「人間にふさわしい」(フランシスコ会聖書研究所訳)。レビの遺訓 3:6 “*prosp̄erontes tōi kyriōi osmēn euōdiās logikēn kai anaimakton thysiān*” 「彼らは、主に、理性的で血の流れないいけにえとして、芳しい薫香を献げる」。ほかに、シビュラの託宣 8:408, 等, 参照。

<sup>261</sup> 「造り変えられて」は *metamorphousthe*。「むしろ」の前の「同化してはいけません」*mē syschēmatizesthe* と対比されている。「重要なのは、コイネー・ギリシア語においては *morphē* や *syschēma* の概念は、(中略)形態とか外形という古典的意味を失っている、という点である。これらの名詞は今や人間存在全体の本質を言い表わす。E・ケーゼマン (岩本修一訳) 『ローマ人への手紙』日本基督教団出版局, 1981 再版 (1980 初版), 612 頁, 参照。中略した部分に、具体例として、1 コリント 7:31, 2 コリント 3:18, フィリピ 2:6~7, 3:21 が挙げられている。

<sup>262</sup> 原文は、*hekastōi hōs ho theos emerisen metron pisteōs*。「神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって」(協会訳)、「神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて」(新共同訳)、「神が各自に信仰の尺度を分け与えられたように」(青野訳) など。*metron* はやはり具体的に「量り」と訳したいところ。なお、「むしろ」の前にある「思うべき限度を越えて」は *par' ho dei phronein* であるが、「自分に与えられている量りの嵩を越えて」と言い換えられるだろう。

<sup>263</sup> 1 コリント 12:12~26, 参照。

6 わたしたちは、わたしたちに与えられた恵みに従って、それぞれ違う賜物<sup>264</sup>を持っています。持っているのが預言の賜物であれば信仰に一致して（預言し）、7 奉仕の賜物であれば奉仕に（励み）、教える人であれば教えに、8 勧める人であれば勧めに（励み）、分け与える人は純真な心で<sup>265</sup>（分け与え）、指導する人は熱心に（指導し）、慈善を行なう人<sup>266</sup>は快く（行ないなさい）。

#### 〈キリスト者の生活指針〉

9 愛は偽らないものです。悪を忌み嫌い、善に寄り添い<sup>267</sup>、10 兄弟愛をもって互いに親愛の情を抱き、敬意を払うことでは互いに率先し合い<sup>268</sup>、11 熱心さでは尻込みせず<sup>269</sup>、霊に燃え、主に仕えなさい。12 希望のゆえに喜び<sup>270</sup>、苦難に際しては耐え忍び、祈りに専念しなさい。13 聖

<sup>264</sup> 「賜物」は、charisma。「charisma（恵みの賜物）とはキリストに対する奉仕の中へと取り入れられた pneumatikon（霊の賜物）のことであり、恵みの具体化され、個別化されたものである」（ケーゼマン、前掲書、620頁）、参照。なお、体の隠喩に続いて、種々の賜物に言及する箇所として、1コリント 12：12～31がある。

<sup>265</sup> 「純真な心で」は、en haplotēti。「物惜しみしない心で」も可能。副詞 haplōs 「物惜しみせずに」と同じ意味になる。「惜しまず」（新共同訳）、「惜しまずに」（新改訳）、「物を惜しまない純真さにおいて」（青野訳）など。名詞 haplotēs は、パウロではほかに、2コリント 1：12、8：2、9：11、13；11：3に出る。

<sup>266</sup> 「慈善を行なう人」は、ho eleōn という分詞形。eleeō は、「憐れむ、手助けする、世話をする」。この動詞は、多くの人に「善いサマリア人」の譬え話を想起させるであろう。

<sup>267</sup> 「寄り添い」は kollōmenoi。

<sup>268</sup> あるいは「敬意をもって互いに相手を自分よりも優れた者と思いなさい」。「競って尊敬し合いなさい」（フランシスコ会聖書研究所訳）もよくニュアンスを捉えている。「相手に先んじる」という原意を生かして、「率先して相手に敬意を払い」も可能。

<sup>269</sup> 「尻込みせず」は、mē oknēroi。「臆せず」「怯まず」も可能。「熱心さでは尻込みせず」を「勤勉で怠らず」（新改訳）、「熱心で、うむことなく」（協会訳）と訳すのは、厳密に言えば誤訳。「熱心さにおいて遅れをとらぬ者〔となり）」（青野訳）は文法的には正しいが、「躊躇せず」と直訳した方がまだいい。

<sup>270</sup> 「希望のゆえに喜び」は、tēi elpidi chairontes。キリスト者の喜びの根

なる者たちの欠乏に共に与って<sup>271</sup>、旅人へのもてなし<sup>272</sup>を追求しなさい。14 [あなたがたを] 迫害する者たち<sup>273</sup>を祝福しなさい、祝福するのであって、呪ってははいけません。15 喜ぶ者たちと共に喜び、泣く者たちと共に泣きなさい<sup>274</sup>。16 互いに同じことを思い、高慢な思いを抱かず<sup>275</sup>、むしろ身分の低い人々と交わりなさい。自分自身を賢い者で見なしてはいけません<sup>276</sup>。17 誰に対しても、悪に悪を返さず、すべての人の前で善いことを心がけなさい。18 できるなら、あなたがたに可能な限り<sup>277</sup>、すべての人と平和に暮らしなさい。19 愛するみなさん、自分で復

---

抛、源泉はまさしく希望である。その希望は、終末論的な興奮・熱狂の刻印を帯びたものである。5：2～5，8：24～27，14：17，15：13；フィリピ2：17～18，4：1，4；1テサロニケ2：19，5：16，さらに，1コリント15：51～58を参照。

<sup>271</sup> 「聖なる者たちの欠乏に共に与って」は、tais chreiais tōn hagiōn koinōnountes。koinōneōは「共に与る，分かち合う，共有する」。したがって、「聖なる者たちの困窮を共に担い」（青野訳），「『聖なる者』たちの乏しさを仲間として分け合い」（本田訳）が原意に近い。「聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け」（新共同訳），「聖なる人々の貧しさを自分のものと考えて力を貸し」（フランシスコ会聖書研究所訳）は若干意識，「貧しい聖徒を助け」（協会訳）はいっそうの意識，「聖徒の入用に協力し」（新改訳）は支持できない。

<sup>272</sup> 「旅人へのもてなし」は，tēn philoxeniān。パウロではここだけに出る語。他にヘブライ13：2。背景には，創世記18：1～15のエピソードがあるが，他に，イザヤ58：7，ヨブ31：32，およびマタイ25：35～40を参照。

<sup>273</sup> 「迫害する者たち」は diōkontas，前節の「追求しなさい」と訳した語は diōkontes。14節については，マタイ5：44，1コリント4：12b～13a，さらに，ルカ6：28，使徒言行録7：60，参照。

<sup>274</sup> シラ書7：34，参照。

<sup>275</sup> 11：20，参照。

<sup>276</sup> 11：25，参照。箴言3：7「自分自身を賢い者とするな」，イザヤ5：21「災いだ，自分の目には知者であり，うぬぼれて，賢いと思う者は」，さらに，箴言26：5，12；28：26，参照。

<sup>277</sup> 原文は，ei dynaton to ex hymōn。直訳的には「あなたがたの側の状況がもし可能ならば」。“if possible, as far as it depends on you” (Dunn)，“if it possibly lies in your power” (Fitzmyer)。「できることなら，あなたがたの力の及ぶ限り」（フランシスコ会聖書研究所訳），「あなたたちの側の努力でできることならば」（本田訳），「もしも〔それが〕可能でありあなたがたと

讐せず、怒り<sup>278</sup>に任せなさい。「『復讐はわたしのもの、わたしが報復する』<sup>279</sup>と主は言われる」と書かれているからです。20しかし、「もしあなたの敵が飢えていたら、彼に食べ物を与えなさい。もし渴いていたら、彼に飲み水を与えなさい。そうすれば、あなたは燃える炭火を彼の頭に積むことになるからである」<sup>280</sup>（とも書かれています）。21悪に打ち負かされてはいけません。むしろ、善によって悪に打ち勝ちなさい<sup>281</sup>。

## 13

### 〈支配者への従順〉

1人はすべて、上に立つ権威に従うべきです。というのは、神によらない権威はなく、現に存在している権威は神によって立てられた<sup>282</sup>ものだ

関わりのあることであるなら」（青野訳）、「できれば、せめてあなたがたは」（新共同訳）「できるかぎり」（協会訳）、など。

<sup>278</sup> 「自分で復讐せず」については、レビ記 19：18 a, 参照。「怒り」はもちろん「神の怒り」を指す。

<sup>279</sup> ヘブライ 10：30 に同じ引用がある。申命記 32：35, 参照。ただし、引用文はマソラとも LXX とも微妙に異なる。最も近いのはタルグム。そこから J・D・G・ダンは、ディアスポラの諸教会に LXX とは異なるテキストが流布していたと想定する。

<sup>280</sup> LXX 箴言 25：21～22 a, 参照。Cf. Dunn, *Romans 9-16*, Word Biblical Commentary 38b, pp. 750f. ダンは、炭火を（鉢に入れて）頭に載せることが心からの悔悛の証拠とされたエジプトの悔悛儀礼が、箴言 25：22 a の元来のイメージの理解に役立つ、というモレンツ説を紹介しつつ、さらにタルグムにおける次のような付加を指摘する。「そして神は彼をあなたに手渡すだろう」あるいは「彼をあなたの友にするだろう」であるが、これは、「あなたは彼を獲得するだろう」という宣教的な含意を持つ。

<sup>281</sup> マタイ 5：39, ベニヤミンの遺訓 4：3 「たとえその人に悪事をはかっても、その人は神に守られつつ、悪に対して善を行なって勝つ。」「十二族長の遺訓」『聖書外典偽典 5 旧約偽典Ⅲ』教文館、1980（再販）、348 頁、参照。

<sup>282</sup> 「立てられた」は tetagmenai < tassō（定める、就ける、任じる、等）。サムエル下 7：11, トビト 1：21, 2 マカバイ 8：22 等、参照。この節全体については、箴言 8：15～16, 知恵の書 6：3, さらに、1 ペトロ 2：13～17, テトス 3：1, 参照。

からです。2したがって、権威に逆らう者は、神の決定に反抗することになり、反抗する者は彼ら自身に裁きを招くでしょう。3というのは、支配者は、善い行ないのときではなく、悪い行ないのときにこそ恐れを感じさせる<sup>283</sup>からです。あなたは、権威を恐れずにいたいと望むのですか。それなら、善を行ないなさい。そうすれば、権威から賞賛を受けるでしょう。4なぜなら、(権威というのは)あなたを善に導くために、神に奉仕する者<sup>284</sup>だからです。しかし、もし、あなたが悪を行なうことがあれば、恐れなさい。権威はいたずらに剣を帯びているわけではありません。(権威は)神に奉仕する者であり、悪を行なう者に怒りを執行する復讐者<sup>285</sup>だからです。5それゆえ、怒りのためばかりでなく、良心のためにもまた従わなければならないのです。6あなたがたが直接税<sup>286</sup>を納めているのもそのためです。(権威は)神に仕える者であり、そのことに

<sup>283</sup> 原文は, hoi gar archontes ouk eisin phobos tōi agathōi ergōi alla tōi kakōi。ここの与格は、背後に行為者を補う(協会訳, 新共同訳, 青野訳, 等)のではなく、「ときや場合」として素直に訳す方が原文の意味に即している。「支配者を恐ろしいと思うのは、良い行ないをするときではなく、悪い行ないをするときです」(新改訳)、「実際、支配者というものは、善い行ないをする場合ではなく、悪い行ないをする場合に恐ろしいのです」(フランシスコ会聖書研究所訳)。“For rulers are not a terror to good conduct but to bad” (Byrne), “For rulers are not a terror to good conduct, only to evil” (Fitzmyer)。

<sup>284</sup> 「神に奉仕する者」は, theou diakonos で直訳すれば「神の奉仕者」(青野訳)。本節の後半に再度出る。

<sup>285</sup> 原文は, ekdikos eis orgēn tōi to kakon prassonti。“an avenger for wrath against the evildoer” (Dunn), “an avenger, bringing wrath upon the wrongdoer” (Fitzmyer), 「悪をなす者に対しては、怒りをもって報いをなすものなのである」(青野訳), 「悪を行う者に怒りをもって報いるのです」(新共同訳)。「怒り」は, 12:19 同様, もちろん, 「神の怒り」のこと。

<sup>286</sup> 原語は, phorous < phoros。「phoros は被支配民が異国の君主に納める直接税的公租(地税または人頭税)であり, 他方 telos [税] は関税と種々の租税(消費税, 取引税, 営業税など)を指しており, これらは間接税として(徴税人を介して徴収される → telōnēs [徴税人] 2.) その時々当局に対する義務である。」(W・レベルによる “phoros” の項目, 『ギリシア語 新約聖書 積義辞典 III』教文館, 1995年, 486頁) 従来は, phoros を「貢」, telos を「税」と訳すのが一般的だった。青野訳では前者が「税金」, 後者が「関税」。

専念しているのです。7 すべての人に、責務を果たしなさい<sup>287</sup>。直接税を納めるべき相手には直接税を、間接税を納めるべき相手には間接税を（納め）、畏れを払うべき相手には畏れを、敬意を払うべき相手には敬意を（払いなさい）。

〈律法を十全に満たす隣人愛〉

8 互いに愛し合うこと以外には、誰に対しても何一つ、あなたがたは責務を負っていません。というのは、他の人を愛する者は律法を十全に満たしている<sup>288</sup> からです。9 実際、「姦通してはいけない、殺してはいけない、盗んではいけない、欲望に駆られてはいけない」<sup>289</sup> ということ、いや何か他の掟があったとしても、それは、次の言葉に要約される<sup>290</sup> のです。すなわち、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」<sup>291</sup> [という言葉に] です。10 愛は、隣人に悪を行ないません。だから、愛は律法を十全に満たすもの<sup>292</sup> なのです。

<sup>287</sup> 原文は、apodote pāsin tās opheilās。訳は、「義務を果たす」と「負債を返す」とに分かれる。後者は、「すべての人に対して負債を返却しなさい」（青野訳）、「すべての人に借りとして負っているものを返しなさい」（フランシスコ会聖書研究所訳）、「あなたたちはだれに対しても、借りは返しなさい」（本田訳）など。動詞は、文頭の apodote（返しなさい、果たしなさい）だけ。pāsin に対応する四つの tōi（人に）が、tās opheilās（負債、義務）に対応する ton phoron（直接税）、to telos（間接税）、ton phobon（畏れ）、tēn timēn（敬意）が後半に現れる。

<sup>288</sup> 「十全に満たしている」は、peplērōken < plēroō。「全うしている」（新共同訳）、「完全に果たしている」（フランシスコ会聖書研究所訳）も可能。ガラテヤ 5：14、参照。「というのは、律法全体は一つの言葉、すなわち、『あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい』という言葉において、十全に満たされているからです」。

<sup>289</sup> 「欲望に駆られてはいけない」は、ouk epithymēseis。7：7でも単独で引用されている。今回、訳語を修正した。一般に使われている「むさぼるな」も既に若い世代には分かりにくいかもしれない。四つの禁止の引用は、LXX 訳申命記 5：17～21、同出エジプト記 20：13～17 による。

<sup>290</sup> 「要約される」は、anakephalaioutai。「総括される」も可能。

<sup>291</sup> レビ記 19：18、さらにマタイ 22：39 および並行箇所、参照。

<sup>292</sup> 「律法を十全に満たすもの」は、plērōma nomū。8 節の peplērōken と対

〈救いが近づいている〉

11 そのうえ<sup>293</sup>、あなたがたはこの時<sup>294</sup>を知っているからです。すなわち、もう既にあなたがたが眠りから起き上がる<sup>295</sup>ときなのです。というのは、今や、わたしたちが初めて信じたときよりも救いが一層近づいているからです。12 夜は更け、昼が近づいています。だから、闇の行ないを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けましょう<sup>296</sup>。13 昼間と同じように、品位ある態度で歩みましょう<sup>297</sup>。酒宴や泥酔、淫らな交わりや好色、争いや妬みを慎み、14 主イエス・キリストを身に着けなさい。欲望のために肉に配慮をしてはいけません。

## 14

〈兄弟を裁いてはいけない〉

1 信仰の弱い人を受け入れなさい。ただ、その諸々の疑念を批判してはいけません<sup>298</sup>。2 何でも食べられると信じている人がいる一方で、弱い

応する訳語にするのが望ましい。「成就している」(8節)、「律法の成就」(本節)も可能。

<sup>293</sup> 「そのうえ」は、kai tūto。これは、訳しにくい言葉。1コリント6：6，8における用法を参考にして訳した。DunnやByrneの説明も参考になる。Cf. Dunn, op. cit. p. 785, Byrne, op. cit. p. 401.

<sup>294</sup> 「この時」は ton kairon。今という終末論的な時、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」(2コリント6：2)と言われる決定的な時。

<sup>295</sup> 「起き上がる」は、egerthēnai。復活を表す動詞でもある。ほとんどの訳が「覚める」。

<sup>296</sup> 6：13，2コリント6：7，10：4，エフェソ6：11，13～17，参照。さらに，2コリント5：2～3，ガラテヤ3：27，参照。

<sup>297</sup> 「歩みましょう」は、peripatēsōmen。もちろん，ここは「生活しましょう，生きましょう」の意味。1テサロニケ4：12，参照。

<sup>298</sup> 原文は，mē eis diakriseis dialogismōn。「その考えを批判してはなりません」(新共同訳)、「ただ，意見を批評するためであってはならない」(協会訳)、「その考えをとやかく言ってはなりません」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「〔彼らの〕考えを非難することのないようにしなさい」，“though not with the view to settling disputes” (Dunn)，“but not to quarrel about disputable matters” (Fitzmyer)。確信を持たずに，あれこれと疑いながら



人は野菜を食べています<sup>299</sup>。3 食べる人が食べない人を見下してはいけません、食べない人が食べる人を裁いてもいけません。というのは、神がその人を受け入れたからです。4 自分のものではない<sup>300</sup> 召使を裁くあなたは、何者なのでしょう。彼が立つか倒れるかは、彼自身の主人次第です。しかし、彼は立たせてもらえるでしょう。というのは、主は、彼を立たせることができるからです。

5 ある日をほかの日よりも大事だと見なす人<sup>301</sup> もいれば、どんな日も同じだと見なす人もいます。各自が自分自身の判断に確信を持ちなさい<sup>302</sup>。6 特定の日を心にかける人は、主のために心にかけます。食べる人も、主のために食べます。というのは、神に感謝しているからです。また、食べない人も主のために食べません。やはり神に感謝しているのです。7 というのは、わたしたちのうち誰一人として、自分のために生きる人はいませんし<sup>303</sup>、また、誰一人として、自分のために死ぬ人もいないからです。8 わたしたちは、生きていても、主のために生きていますし、死ぬとしても、主のために死ぬからです。だから、わたしたちは、生きるにしても死ぬにしても、主のもの<sup>304</sup> なのです。9 というのは、キリストが死に、そして生きられたのは、まさに、死んだ者たち

---

思い巡らしている弱い人々の考えを批判してはいけない。

<sup>299</sup> ユダヤ人にとって、食材や調理法が食物規定に適っている（コシェルである）かどうかは日常生活を送る上で重要な問題だった。レビ記 11：1～19、17：13～16、参照。さらに、ダニエル 1 章、1 コリント 10：25～29、参照。ディアスポラのユダヤ人・キリスト者の中に市販の食肉をめぐる、意見の相違があった。

<sup>300</sup> 「自分のものではない」は、*allotrion*。節の後半に出る「主人」「主」（いずれも *kyrios*）のものであることを暗示している。

<sup>301</sup> ガラテヤ 4：10、参照。

<sup>302</sup> 原文は、*hekastos en tōi idiōi noi plērophoreisthō*。nous は、ここでは、「理性」よりもむしろ「考え、判断、心」。

<sup>303</sup> 2 コリント 5：15 「その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分のために死んで復活してくださった方のために生きることなのです」、ガラテヤ 2：20 a 「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」、参照。

<sup>304</sup> 1 コリント 3：23、参照。

と生きている者たち両方の主となるためだったからです。10 それなのに、あなたはなぜ、あなたの兄弟を裁くのですか。あるいは、あなたもなぜ、あなたの兄弟を見下すのですか。実際、わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立たされるのです<sup>305</sup>。11 こう、書かれているからです。

「『わたしは生きている』と主は言われる<sup>306</sup>。

『わたしに向かって、すべての膝はかがみ、

すべての舌は、神に向かって罪を告白し賛美をささげるであろう』<sup>307</sup> と。」

12 それで[だから]、わたしたちは各自、自分自身について、[神に向かって] 申し開きすることになるのです。

〈兄弟を躓かせてはいけない〉

13 だから、わたしたちは、もう二度と互いに裁き合うのはやめましょう。いや、それよりもむしろ、次のことを決心しなさい<sup>308</sup>。すなわち、兄弟の前に妨げや躓きのもとになるものを置かない<sup>309</sup>、と。14 わたしは、主イエスの内にあつて、知っていますし、確信してもいます。すなわち、それ自体で汚れたものは一つもなく、それを汚れたものとする人がいてはじめて<sup>310</sup>、その人にとってそれが汚れたものになるのです。

<sup>305</sup> 2 コリント 5 : 10, 参照。

<sup>306</sup> イザヤ 49 : 18, エレミヤ 22 : 24, エゼキエル 5 : 11, 等, 参照。

<sup>307</sup> LXX 訳イザヤ 45 : 23 を、「すべての舌は」pāsa glōssa と「罪を告白し賛美をささげるであろう」exomologēsetai の語順を入れ替えて引用。原文のexomologēsetai に続く tō<sub>i</sub> theō<sub>i</sub> という与格は、ヘブライ語の文章構成に由来する所謂ヘブライズムで、exomologēsetai tō<sub>i</sub> theō<sub>i</sub> の元来の意味は「神を賛美するであろう」である。ただ、引用を挟み込んでいる 10 節後半と 12 節の意味から、終末時の審判において神の裁きの座の前でなされる個々人の申し開きを、パウロは念頭に置いていると思われるので、「罪を告白して賛美をささげるであろう」とあえて説明的に訳した。O・ホフイウスによる“exomologeō”の項目、『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 II』教文館、1994 年、34～35 頁、参照。

<sup>308</sup> 「裁く」も「決心する」も krinō という同じ動詞。

<sup>309</sup> 1 コリント 8 : 9, 13 ; 10 : 23, 参照。

<sup>310</sup> 原文では ei mē が使われている。このニュアンスを訳語に反映させていない日本語訳が多い。

15 もし、実際、食べ物のごとであなたの兄弟が心を痛めているとすれば、もはや、あなたは愛に従って歩んではいません。あなたの食べ物のせいでその人を滅ぼしてはいけません。その人のために、キリストは死んだのです。16 だから、あなたがたにとって善いもの<sup>311</sup>が中傷の種にされないようにしなさい。17 というのは、神の支配<sup>312</sup>は食べること<sup>313</sup>、飲むことではなく、むしろ、聖霊によって与えられる義、平和、喜び<sup>314</sup>だからです。18 実際、このことのためにキリストに仕える人が、神に喜ばれ、また、人々にも信用されるのです。19 こういうわけだから、わたしたちは、平和に役立つことや、互いの建設に役立つこと<sup>315</sup>を追求しましょう。20 食べ物のために、あなたは神の業を破壊してはいけません。すべてのものがたしかに清いのです。しかし、躓きを感じたままで<sup>316</sup>食

<sup>311</sup> 「あなたがたにとって善いもの」は、hymōn to agathon。直訳すると「あなたがたの善いもの」。

<sup>312</sup> 通常は、もちろん、「神の国」。しかし、やはり、「支配」の側面を強調したい。青野訳は「神の王国」。

<sup>313</sup> 1コリント8：8、参照。

<sup>314</sup> 原文は、dikaiosynē kai eirēnē kai chara en pneumati hagiōi。en pneumati hagiōiを直前の「喜び」だけにかけるのは、協会訳、新改訳、青野訳である。内容的に、「義、平和、喜び」全体にかけるべきであろう。

<sup>315</sup> 「平和に役立つこと」は ta tēs eirēnēs, 「互いの建設に役立つこと」は ta tēs oikodomēs tēs eis allēlous。cf. “what makes for peace and for the building up of one another” (Dunn), “what makes for peace and what makes for the edification of each other.” (R. Jewett, *Romans*, Hermeneia, Fortress, 2006) なお、oikodomē「建設」は、キリストの体である教会を建てること。動詞 oikodomeōを含めた「建てる」「建設」の意味については、特に1コリント8：1, 10：23, 14：3～5, 12, 17, 26；2コリント10：8, 12：19, 13：10；1テサロニケ5：11、参照。

<sup>316</sup> 原文は、dia proskommatos。「躓きを感じたままで食べる人」の解釈は分かれる。「それを食べて人をつまずかせる者」(協会訳)、「食べて人を罪に誘う者」(新共同訳)、「食べて人を罪に陥れる者」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「それを食べて人につまずきを与えるような人」(新改訳)。むしろ、これらは誤訳であろう。「食べてそれに躓く人」(青野訳)は一応誤訳を免れてはいる。パウロが言いたいのは、文脈から明らかなように、それ自体汚れた食べ物はないという確信を持たずに、ユダヤ教の食物規定が頭をよぎって、これを食べたなら汚れるのではないかとの疑念を払拭しきれないまま、食べる

べる人にとっては、悪いものになります。21 肉を食べないこと、ぶどう酒を飲まないこと、また、あなたの兄弟が躓くことは何であれしないことは、良いことです<sup>317</sup>。22 あなたは、あなたが今持っている[その]<sup>318</sup> 信仰を、あなた自身のために神の前で持っていなさい。自分が判断して決めたこと<sup>319</sup> 自分自身を裁かずにすむ人は幸いです。23 しかし、疑念を抱いている人がもし食べれば、有罪宣告を受けたことになります。なぜなら、それは信仰に基づいていないからです。信仰に基づいていないことはすべて、罪なのです。

## 15

〈自分ではなく隣人を喜ばせなさい〉

1 さて、わたしたち強い者は、強くない人々の諸々の弱さを担うべき<sup>320</sup> であって、自分自身を喜ばせるべきではありません。2 わたしたちは各自、隣人を喜ばせるべきです。それが善いことになり、建設のためになる<sup>321</sup> のです。3 というのは、キリストも御自身を喜ばせはしなかったからです。むしろ、次のように書かれているとおりです。「あなたをののしる者たちのののしりが、わたしの上に降りかかった。」<sup>322</sup> 4 予め書かれた

---

人である。

<sup>317</sup> 13 節, 参照。

<sup>318</sup> [その] と訳したのは、関係代名詞・女性・単数・対格形の hēn。

<sup>319</sup> 「自分が判断して決めたこと」は、en hōi dokimazei。

<sup>320</sup> 14 : 1, ガラテヤ 6 : 2, 参照。

<sup>321</sup> 「善いことになり、(キリストの体の)建設のためになる」は、eis to agathon pros oikodomēn という二つの目的句。訳しにくい箇所である。「キリストの体の」を補って読むと、「強くない人々」をも含めた共同体としての教会の「建設」を考えているパウロの姿がより鮮明になるだろう。eis to agathon を前の tōi plēsion aresketō にかけて読む(協会訳, 新共同訳)例もある。二つの目的句とするのは、Dunn や Jewett である。Dunn, op. cit., p. 838. および Jewett, op. cit. p. 878f. oikodomē については、少し前の 14 : 19, 1 テサロニケ 5 : 11, 参照。

<sup>322</sup> LXX 訳詩編 68 : 10 b (新共同訳では、69 : 10 b。なお、LXX 訳詩編はマソラ版詩編の 9 編と 10 編をまとめて 9 編としたため、マソラ版の 11 編が LXX 訳では 10 編に繰り上がっている。)

ことは何でも、わたしたちの教化のために書かれたのであり<sup>323</sup>、それは、忍耐をとおして、また、聖書の慰めをとおして<sup>324</sup>、わたしたちが希望を持つためなのです。5 忍耐と慰めの神<sup>325</sup>が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って、互いに同じ思いを抱かせてくださいますように。6 それは、あなたがたが、心を一つにし<sup>326</sup>、口をそろえて、神、すなわち、イエス・キリストの父<sup>327</sup>を賛美するためです。

〈福音はユダヤ人と異邦人両方のため〉

7 それゆえ、あなたがたは、互いを受け入れなさい<sup>328</sup>。ちょうど、キリストもあなたがたを、神の栄光のために、受け入れてくださったように。8 わたしは言います。実際、キリストは神の真理のために割礼(ある者)に仕える者となりましたが、それは、父祖たちの約束<sup>329</sup>を立証するためであり、9 また、異邦人たちが憐れみのゆえに神を賛美するようになるためだったのです。次のように書かれているとおりです。

「このことのゆえに、わたしは異邦人たちのあいだであなたを賛美し、

<sup>323</sup> 1コリント9：10、参照。さらに2テモテ3：16、参照。

<sup>324</sup> 原文は、*dia tēs hypomonēs kai dia tēs paraklēseōs tōn graphōn*。tēs paraklēseōsの前にdiaがない異読に従う翻訳もある。「聖書の与える忍耐と慰めとによって」、「聖書から忍耐と慰めを学んで」(新共同訳)、「聖書が与える忍耐と励ましによって」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「聖書の与える忍耐と励ましによって」(新改訳)。ネストレ27版とおりに読むのは、青野訳、本田訳。paraklēsisは、parakaleōと同根。当然、そこには、慰め、励まし、勧めが含意されている。聖書の慰め(励まし)については、1マカバイ12：9、参照。

<sup>325</sup> 2コリント1：3、参照。

<sup>326</sup> 12：16、2コリント13：11、フィリピ2：2、4：2、さらに、1コリント1：10、参照。

<sup>327</sup> 2コリント1：3「わたしたちの主イエス・キリストの父である神」、参照。

<sup>328</sup> 14：1、さらにフィレモン17、参照。

<sup>329</sup> 「父祖たちの約束」は、*tās epangeliās tōn paterōn*。「父祖たちの受けた約束」(協会訳)、「父祖たちに対する約束」(新共同訳)、「父祖たちへの約束」(青野訳)などのように補って訳す場合が通例。

あなたの名を讃えて歌うであろう。」<sup>330</sup>

10 そして、さらに言っています。

「異邦人たちよ、主の民とともに喜べ。」<sup>331</sup>

11 そして、さらに、

「すべての異邦人たちよ、主を賛美せよ。

すべての民よ、主をほめたたえよ。」<sup>332</sup>

12 そして、さらにイザヤが言っています。

「現れるだろう、エッサイの根が

そして、異邦人たちを支配するために立ち上がる者が。

彼に異邦人たちは望みをかけるであろう。」<sup>333</sup>

13 希望の神が、信じることのうちにあるあらゆる喜びと平和で、あなたがたを満たし、終にはあなたがたが、聖霊の力によって、希望に満ち溢れることができますように。

#### 〈パウロの宣教の使命〉

14 さて、わたしの兄弟のみなさん、わたし自身も、あなたがたについて、確信しています。すなわち、あなたがた自身も、善意に溢れ、あら

<sup>330</sup> LXX 訳詩編 17:50 = 2 サムエル 22:50, 参照。新共同訳 18:50 = サムエル下 22:50, 参照。ちなみに、新共同訳でいえば、サムエル下 22:2~51 は、詩編 18:3~51 に一致している。「讃えて歌うでしょう」は、psalō < psallō (賛美の歌をうたう、誉め歌う)。psalmos (賛歌、詩編) と同根である。

<sup>331</sup> LXX 訳申命記 32:43, 参照。「主の」は、原文では autou。ちなみに新共同訳 (マソラによる) では、「主の民に喜びの声をあげよ。」

<sup>332</sup> LXX 訳詩編 116:1。ただし、パウロは語順を一箇所入れ替え(「すべての異邦人よ」と「主を」)、前半と後半の間に kai を挿入し、後半の動詞 epainesate を epainesatōsan に替えている。

<sup>333</sup> LXX 訳イザヤ 11:10。ただし、パウロは冒頭の「そしてその日には」 en tēi hēmerāi ekeinēi を省いて引用している。この箇所では、LXX 訳はマソラの本文と大きく違っている。なお、この部分の引用に関しては、あえて通常の和訳と語順を変えて「現れるであろう」を、原文どおり先頭に出した。それは、「現れる」のが「エッサイの根」と「異邦人たちを支配するために立ち上がる者」の両者であることを明示するためである。ちなみに、パウロは「そして」を「すなわち」の意味に解しているだろう。

ゆる知識に満たされ<sup>334</sup>、互いに訓戒し合うことさえできる人々だ、と。15しかし、わたしは、あなたがたに再度思い起こしてもらうために、神からわたしに与えられた恵みによって<sup>335</sup>、ところどころ<sup>336</sup>かなり大胆にあなたがたに書きました。16それは、わたしが、異邦人たちのためにキリスト・イエスに仕える者<sup>337</sup>、神の福音に祭司として仕える者<sup>338</sup>となるためですが、それはまた<sup>339</sup>、異邦人という献げ物<sup>340</sup>が、聖霊によって聖なるものとされた、神に喜んで受け入れられるものとなるためなのです。17それで、わたしは、神のために仕える職に<sup>341</sup>、キリスト・イエスにあって誇りを持っています。18というのは、わたしはある一つのこと以外は

<sup>334</sup> 1コリント1：5、フィリピ1：9、参照。

<sup>335</sup> 1コリント3：10、ガラテヤ2：9、参照。

<sup>336</sup> 原文は、apo merous。「部分的に（は）、一部分（は）」。

<sup>337</sup> 11：13、参照。

<sup>338</sup> 原文は、hierourgounta to euangelion tou theou。hierourgeōは「祭司の役目を務める、祭司として仕える」の意。所謂hapax legomenonでLXX訳にも用例はないが、4マカバイ7：8の異読に、tūs hierourgounta ton nomon「祭司として律法に仕える者たち」という言葉が出る。cf. Dunn, op. cit. p. 860.

<sup>339</sup> 原文の hina を「それはまた」と16節の結びの「…ためなのです」とに分解して、目的用法であることを表した。かなり長い一つの文章である15節～16節の論述の順序を崩さないための苦肉の策でもある。

<sup>340</sup> 原文は、hē prosphora tōn ethnōn。「異邦人」と「献げ物」は同格。「異邦人たちの献げ物」（青野訳）ではない。

<sup>341</sup> 原文は、ta pros ton theon。おそらく16節の内容「異邦人たちのためにキリスト・イエスに仕える者、神の福音に祭司として仕える者」として働くことを言い換えたものであろう。直訳は「神に向かったの事柄、神のための事柄」。そこに込められた意味を考えると、「神に向かつて行なう事柄、神のために行なう事柄」。それで、「神のために仕える職務」と訳した。「神のために働くこと」（新共同訳）、「神への奉仕」（協会訳、フランシスコ会聖書研究所訳）、「神に仕えること」（新改訳）も同様の理解。「神の前で」（青野訳）の場合、最初にある ta をどう説明するか、という問題が残り、支持できないし、もし、明示的に「神の前で」と言いたいのであれば、14：22同様、enōpion tou theou を使うだろう。“my work for God” (NRSV), “the service of God” (NEB), “my service of God” (GNB), “in reference to what concerns God” (Dunn), “in what pertains to God” (Fitzmyer), “in connection with the service of God” (Byrne), ただし、“before God” (Jewett) も。全く同じ句がヘブライ2：17、5：1にも出る。ちなみに、新共同訳では、

あえて何も話そうとは思わないからです。それは、キリストが異邦人の従順のために、わたしをとおして、言葉と行ないによって、しるしや奇跡の力によって<sup>342</sup>、[神の]霊の力によって<sup>343</sup>、働かれた、というそのことです。こうして、わたしは、エルサレムを出発し、巡りめぐってイリュリコンまで、キリストの福音を満ち溢れさせました<sup>344</sup>。20 このように、わたしは、キリストの名がまだ唱えられていない所で福音を伝えるべく熱心に努めてきたのです。それは、他人の土台の上に建設しないようにするため<sup>345</sup>で、21 むしろ、次のように書かれているとおりです。

「彼について語り聞かされたことのない人々が、見るであろう。また、聞いたことのない人々が、悟るであろう。」<sup>346</sup>

#### 〈ローマ訪問の計画〉

22 そのために、あなたがたのところへ行くことを、わたしはたびたび妨害されてきました<sup>347</sup>。23 しかし、今や、この地方にはわたしの働く場所にはもはやありませんし、また、あなたがたのところへ行きたいという熱望をわたしは長年持ち続けてきました<sup>348</sup>ので、24 わたしがイスパニアに行くときに（それを叶えたいのです）。というのは、わたしは、（そちらを）通るときにあなたがたに会って、（先のわたしの熱望が）まず、あなたがたによって幾分かでも満たされてから<sup>349</sup>、あなたがたの手で彼の

---

順に「神の御前において」、「神に仕える職に」と訳し分けられているが、むしろ「憐れみ深い（大祭司）、つまり神のための職務に忠実な大祭司となって」、「すべて大祭司は、人々の中から選ばれて、人々に代わって、神のための職務に任命される」と訳すのが望ましい。新改訳を参照。

<sup>342</sup> 2 コリント 12：12，参照。

<sup>343</sup> 1 コリント 2：4，1 テサロニケ 1：5，参照。

<sup>344</sup> 「満ち溢れさせました」は、peplērōkenai。「至るところに広めてきました」とも訳せる。

<sup>345</sup> 1 コリント 3：10，2 コリント 10：15～16，参照。

<sup>346</sup> LXX 訳イザヤ 52：15。パウロは、元來文頭にあった opsontai（見るであろう）を、2行目の語順に合わせて文末に移動した。

<sup>347</sup> 1：13，1 テサロニケ 2：18，使徒言行録 16：6，参照。

<sup>348</sup> 1：10，11，参照。

<sup>349</sup> 原文は、ean hymōn prōton apo merous emplēsthō。文法的に言えば、



地へ送り出してもらいたい<sup>350</sup>と望んでいるからです。25しかし、今は、聖なる人々に仕えるために、エルサレムに行きます<sup>351</sup>。26というのは、マケドニアとアカイア<sup>352</sup>がエルサレムにいる聖なる人々の中の貧しい人々に対してある援助を<sup>353</sup>することを、喜んで決めた<sup>354</sup>からです。27実際、喜んで決めたのですが、彼らはその人々に<sup>355</sup>責務を負った者でもあるのです。というのは、もし、異邦人たちがその人々の霊的なものに与ったのであれば、肉的なものによってもその人々に仕える責務を彼らは負っている<sup>356</sup>からです。28だから、わたしは、このことをやり遂げてか

---

主語は23節の *epipothiān* …… *tou elthein pros hymās* 「あなたがたのところへ行きたいという熱望」以外にないであろう。「まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから」(新共同訳)、「まず幾分でもわたしの願いがあなたがたによって満たされたら」(協会訳)、「まず、しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから」(新改訳)、“once I have had the full pleasure of being with you for a time” (Dunn), “once I have enjoyed your company for a while” (Fitzmyer), “once I have enjoyed, at least some measure, your company” (Byrne), “after I first have the full pleasure of your company for a while” (Jewett)。

<sup>350</sup> 「送り出してもらいたい」は、*propemphēnai*。直訳では「送り出してもらうこと」(受動・不定詞)。*elpizō* 「(わたしは)望んでいる」の補語。「送り出してもらう」については、使徒言行録15:3, 20:38, 21:5, 1コリント16:6, 11; 2コリント1:16, 等, 参照。「送り出してもらう」は、送り出す者たちから、時には同伴者の世話を含めて旅支度(食糧, 旅費の一部, 移動手段, 紹介状等)を整えてもらうなどの積極的な援助を受けることを意味した。ケーゼマン, 前掲書, 735頁, Dunn, op. cit. p. 872, Jewett, op. cit. p. 925f. 等を参照。

<sup>351</sup> 使徒言行録19:21, 20:22, 参照。

<sup>352</sup> もちろん、「マケドニアとアカイア」は「マケドニアとアカイアの信徒たち(教会)」の意味。

<sup>353</sup> 原文は, *koinōniān tina*。 *koinōnia* は原意を尊重すれば, むしろ「交わりのしるし」(としての援助, 義援金, 募金, 寄付金)。

<sup>354</sup> 「喜んで決めた」は, *eudokēsan*。 *eugokeō* は「喜ぶ, 気に入る, 選ぶ, 決める, 定める」。 *eu-* (よい, 進んで, 喜んで) のニュアンスがここでは生かされるべきだろう。ここに報告されている援助の決定については, 使徒言行録11:27~30, 2コリント8:1~4, 9:2, 12, 参照。

<sup>355</sup> 原語は, *autōn*。「貧しい人々」を含めたエルサレムの聖なる人々を指す。

<sup>356</sup> 1コリント9:11, さらに, 同16:1~3, 2コリント8:1~7, 9:

ら、つまり、その実りをその人々に封印して確実に手渡して<sup>357</sup> から、あなたがたのところを経由してイスパニアに行くつもりです。29 しかし、わたしは知っています。(そのとき)わたしは、キリストの祝福に満たされて<sup>358</sup> あなたがたのところに行くことになるだろう、と。

30 さて、[兄弟のみなさん、] わたしたちの主イエス・キリストをとおして、また、霊の愛をとおして<sup>359</sup>、わたしはあなたがたに懇願します。どうか、わたしのために、神に向かってささげる祈りによって、わたしと一緒に戦ってください<sup>360</sup>。31 そうすれば、わたしは、ユダヤにいる信仰

12~14, ガラテヤ 6 : 6, 参照。

<sup>357</sup> 原文は, sphragismenos autois ton karpon touton. Fitzmyer は, 小作農が収穫物を出荷する際に, 収穫物を入れた袋を封印した慣例によって, 説明する。彼によれば, パウロは, この援助(募金)を主の農場に自分が創った諸教会がもたらす実り(収穫物)として受け止めてもらうべく, この比喻を使った。この比喻を使うことによって, パウロは, 自分がいまだにエルサレムでは疑いを持たれていることを仄めかしている。cf., Fitzmyer, op. cit. p. 723, Dunn, op. cit. pp. 876f.

<sup>358</sup> 原文は, en plērōmati eulogiās Christou.

<sup>359</sup> 「霊の愛をとおして」は, dia tēs agapēs tou pneumatōs. 「霊の愛」は「(聖)霊によって注がれる愛」「(聖)霊が注ぐ愛」と言い換えることができる。5 : 5, 参照。

<sup>360</sup> 原文は, synagōnisasthai moi en tais proseuchais hyper emou pros ton than. synagōnizomai (一緒に戦う)の1 aorist 不定詞形は, paralalō (わたしは懇願します)の内容。祈りによって一緒に戦ってほしいと懇願する理由は, 次節で示される。「わたしのために, わたしと一緒に神に熱心に祈ってください」(新共同訳), 「ともに力をつくして, わたしのために神に祈ってほしい」(協会訳), 「私のために, 私とともに力を尽くして神に祈ってください」(新改訳), 「神に向けた, 私のための祈りにおいて, 私と共に力を合わせてほしい」(青野訳), 「わたしのために, わたしといっしょに, 懸命に神に祈ってください」(本田訳)は, むしろ原文の折角のニュアンスを無視していると言ふべきであろう。「一緒に戦う」と訳しているのは, フランシスコ会聖書研究所訳, 柳生訳。"to strive together with me in your prayers to God on my behalf" (Byrne), "to contend with me in your prayers to God on my behalf" (Dunn), "to join me in my struggle by praying to God on my behalf" (Fitzmyer), "to join in my struggle by praying in my behalf before God" (Jewett) もそうである。「一緒に戦う」については, フィリピ 1 : 27, 4 : 3, 参照。

を受け入れていない者たちから<sup>361</sup> 救い出され、また、エルサレムに対するわたしの奉仕も聖なる人々に喜んで受け入れられるものとなるでしょうし、32 神の意志によって、喜びのうちにわたしがあなたがたのところに行き、あなたがたと一緒に憩うこともできるようになるでしょう。33 平和の神<sup>362</sup> があなたがた全員とともに（いてくださいますように）、アーメン<sup>363</sup>。

## 16

### 〈個人的な挨拶〉

1 さて、わたしたちの姉妹フォイベ<sup>364</sup> を紹介します。彼女は、ケンクレ

<sup>361</sup> 使徒言行録 20：3，22～24；21：13，さらに、同 21：27～36；23：12～15，参照。また、1 テサロニケ 2：15，2 テサロニケ 3：2 も参照。

<sup>362</sup> 16：20，1 コリント 14：33，2 コリント 13：11，フィリピ 4：9，1 テサロニケ 5：23，ヘブライ 13：20，さらに 2 テサロニケ 3：16，参照。

<sup>363</sup> この文章で分かるように、元来、この手紙は、ここで終わっていたという説もある。その場合に、最もローマ以外の土地の信徒（例えばエフェソ）に宛てて書かれた手紙が、後から末尾に付加されたとされる。しかし、16：1～2 をパウロ自身による付加とする説もあり、この可能性も否定しきれない。いずれにせよ、少なくとも、16：3～24 は、それまでのこの手紙の文章とかなり趣を異にしているのは、確かであろう。これに続く部分に、ネストレーアーラント 27 版本文には採用されなかった異読（24 節）があり、本文批評上の写本に関する比較資料欄（critical apparatus）に、載っている。新共同訳では、本文完結後に、本文とは区別して、「底本に節が欠けている箇所  
の異本による訳文」として、「わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同と共にあるように」という訳文が記載されている。

<sup>364</sup> コリントの東の港町ケンクレアイで暮らす異邦人のキリスト者である彼女は、解放奴隷であったが、裕福な家主で、多くのキリスト者を支える援助者であり、当地の教会の奉仕者であった。彼女の家がいわゆる「家の教会」になっていたことは大いにあり得る。ローマの信徒たちへ宛てたこの手紙をケンクレアイからローマへ運んで、彼らの前で朗読して聞かせたのもおそらく彼女だった。J・D・クロッサン、「パウロと平等の正義」、『国際聖書フォーラム 2006 講義録』日本聖書協会、2006 年、166～183 頁、特に、177 頁、「phoibe」の項目、『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 III』教文館、1995 年、483 頁、参照。なお、このフォイベをはじめ、この章に登場する多くの人の

アイにある教会の奉仕者で [も] あります。2 あなたがたに、聖なる者としてふさわしく、彼女を主にあって迎え入れ、あなたがたの助けを必要とすることがあれば、どんなことでも、彼女を助けてあげてほしいのです。というのは、彼女は多くの人々の援助者となったからですが、わたし自身の援助者でもあります。

3 キリスト・イエスにあってわたしの同労者であるプリスカとアキュラ<sup>365</sup> によろしく伝えてください<sup>366</sup>。4 二人は<sup>367</sup>、わたしの命のために、彼ら自身の首を差し出してくれたのです。彼らに対しては、わたしだけではなく、異邦人のすべての教会もまた感謝しています。5 二人の家に集まる教会 (のみなさん)<sup>368</sup> にも (よろしく伝えてください)。愛する<sup>369</sup> エパイネトスによろしく伝えてください。彼は、アジアでキリストに献げられた初穂<sup>370</sup> です。6 マリアによろしく伝えてください。彼女は、あ

---

社会的背景や教会における役割、あるいはそれぞれの名前の文化的背景については、Jewett, op. cit. pp. 942ff. を参照。

<sup>365</sup> プリスカ (使徒言行録では、プリスキラという指小詞つきの愛称で呼ばれている) とアキュラは、夫婦で活動する異邦人キリスト者の代表的宣教者。この二人については、使徒言行録 18: 2~3, 18, 26 等, 参照。7 節に出るアンドロニコスとユニアは、やはり夫婦で活動するユダヤ人キリスト者の代表的宣教者。なお、ネストレーアーラント 27 版でも、本文にユニアス (他の世俗文献に例証がない男性名。人名で例証が皆無ということ自体、男性名であることが疑われる) が採用されていたが、1998 年の 27 版第 5 修正刷り以降、幾つかの異読にあるユニアという女性名が採用されている。K・ヴァハテル「ネストレーアーラント最新版の歴史と方針」、『国際聖書フォーラム 2006 講義録』日本聖書協会、2006 年、94~108、特に 99 頁、参照。

<sup>366</sup> 「よろしく伝えてください」は、aspasasthe < aspazomai (挨拶する) の 1 aorist, 2 人称, 命令形。

<sup>367</sup> 「二人は」と訳したのは、関係代名詞 hoitines, 先行詞がプリスカとアキュラ。以下、5 節の「彼は」も関係代名詞 hos, 6 節の「彼女は」も同じく hētis。

<sup>368</sup> 「二人の家に集まる教会 (のみなさん)」は、tēn kat' oikon autōn ekklēsiān。1 コリント 16: 19, tēi kat' oikon autōn ekklēsiāi, さらに、フィレモン 2, コロサイ 4: 15, 参照。

<sup>369</sup> 「愛する」は、ton agapēton mou。日本語では、形容詞で「愛する」と言えば、文脈上「わたしの愛する」を現すので、「わたしの」は省いた。8 節のアンプリアトス、9 節のスタキュスを修飾する同一の句についても、同様。

<sup>370</sup> 「アジアでキリストに献げられた初穂」は、aparchē tēs Asiās eis

なたがたのために大いに労苦して働いてくれました。7わたしの同胞で、わたしの囚人仲間<sup>371</sup>でもあるアンドロニコスとユニアによろしく伝えてください。二人は、使徒たちの間で傑出した<sup>372</sup>人で、わたしよりも前にキリストの内に生きる者となりました<sup>373</sup>。8主の内に生きる、愛するアンプリアトスによろしく伝えてください。9キリストにあってわたしたちの同労者であるウルバノスと愛するスタキウスによろしく伝えてください。10正真正銘、キリストの内に生きている<sup>374</sup>アペレスによろしく伝えてください。アリストブロス家に属する者たち<sup>375</sup>によろしく伝えて

---

Christon。「アジア州で最初に洗礼を受けた者」の意。エパイネトスが異邦人であったのはほとんど確実で、おそらく、プリスキラとアキュラの手で信仰に導かれ、仕事も一緒にしていたが、二人がローマに戻るときに二人に同行し、二人の家に集まる教会に所属していたようである。cf. Dunn, op. cit. p. 893.

<sup>371</sup> 原文は、synaichmalōtous mou. synaichmalōtos < syn + aichmalōtos (捕虜, 囚人) < aichmalōteuō (捕虜にして連行する)。直訳すると「わたしの捕虜仲間」, 「わたしの囚人仲間」。青野訳は「囚人仲間」。「わたしと一緒に捕らわれの身となったことのある」(新共同訳), 「わたしと一緒に投獄されたことがある」(協会訳) などのような説明的な訳が従来なされてきた。

<sup>372</sup> 「傑出した」は、episēmoi. episēmos < epi + sēma, sēmeion。語源的には、「優れたしるしを帯びた」。そこから「優れた, 卓越した, 際立った」の意。ヘロドトス, プルタルコス, ヨセフス等の用例を基にしたジュウエットの説明は理解を深めてくれる。cf. Jewett, op. cit. p. 963.

<sup>373</sup> 「キリストの内に生きる者となりました」は、gegonan en Christō<sub>1</sub>。

<sup>374</sup> 「正真正銘, キリストの内に生きている」は、ton dokimon en Christō<sub>1</sub>。dokimos は、「その真正性が検証済みであること」。検証の基準は、キリストの内に生きる姿勢, 生き方, 実践。「真のキリスト信者」(新共同訳), 「真のキリスト者」(フランシスコ会聖書研究所訳), 「キリストにあって練達な」(協会訳), 「キリストにあって練達した」(新改訳), 「キリストにあって適格者である」(青野訳), 「キリストと一体のものとしては保証つきの」(本田訳), 「筋金入りのキリスト者」(柳生訳)。なお, 特に, Dunn, op. cit. p. 896, Jewett, op. cit. pp. 965f., 参照。

<sup>375</sup> 「アリストブロス家に属する者たち」は、tous ek tōn Aristoboulou。ジュウエットの指摘は鋭い。パウロはアリストブロス家の主に対しては挨拶を頼んでいない。挨拶の対象は、アリストブロス家に属する一部の者たちに過ぎない。“a probable reference to a congregation among the slaves of his household.” アリストブロス家で働く奴隷たちの中にキリスト者の群れが

ください。11わたしの同胞のヘロディオンによろしく伝えてください。ナルキッソス家に属する者たち<sup>376</sup>で主の内に生きている者たち<sup>377</sup>によろしく伝えてください。12主にあつて労苦して働いているトリュファイナとトリュフォサによろしく伝えてください。愛するペルシスによろしく伝えてください。彼女は、主にあつて大いに労苦して働きました。13主にあつて選ばれた人であるルフォス<sup>378</sup>とわたしの母でもある彼の母上によろしく伝えてください。14アシュンクリトス、フレゴン、ヘルメス、パトロバス、ヘルマス、そして彼らと一緒にいる兄弟たちに、よろしく伝えてください。15フィロロゴスとユリア、ネレウスと彼の姉妹たち、そしてオリュンパス、さらに彼らと一緒にいるすべての聖なる者たちによろしく伝えてください。16あなたがたは、聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい<sup>379</sup>。キリストのすべての教会があなたがたに挨拶を送っています。

17兄弟のみなさん、わたしは、あなたがたに勧めます。あなたがたが学んだ教えに反して、不和<sup>380</sup>や躓きを生み出す者たちを警戒し、また、彼らから遠ざかりなさい<sup>381</sup>。18というのは、このような者たちは、わたしたちの主キリストに仕えずに、むしろ彼ら自身の腹に（仕えているの）であり、甘い言葉や美辞麗句を使って無邪気な人々の心を騙しているからです。19あなたがたの従順は、実際、すべての人のもとにすでに達しています。それで、わたしは、あなたがたのことを喜んでいるのですが、さらに、わたしは、あなたがたに、善に対しては賢く、悪に対しては純真であつてほしいと思っています<sup>382</sup>。20平和の神は、サタンを、あなた

---

あつた、というのである。cf. R. Jewett, op. cit. p. 966.

<sup>376</sup> 「ナルキッソス家に属する者たち」は、tous ek tōn Narkissou。ここでもアリストブロス家に属する者たち」同様、奴隷の中のキリスト者の群れ。

<sup>377</sup> この「主の内に生きている者たち」は、tūs ontas en kyriōi。

<sup>378</sup> イエスの十字架を途中から代わりに担わされたキュレネ人のシモンの息子ルフォス（マルコ 15：21、参照）とする節もある。cf. Jewett, op. cit. pp. 968f.

<sup>379</sup> 1コリント 16：20、2コリント 13：12、1テサロニケ 5：26、参照。

<sup>380</sup> 「不和」は、ガラテヤ 5：19～21の悪徳表に出る。

<sup>381</sup> 1コリント 5：9～11、さらに2テサロニケ 3：6、14、参照。

<sup>382</sup> 原語は、akeraiūs < akeraios < a + kerannymi（混ぜる、混ぜ合わせる）。

がたの足の下で今すぐにも踏み砕くでしょう<sup>383</sup>。わたしたちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように<sup>384</sup>。

21 わたしの同労者ティモテオス<sup>385</sup>があなたがたに挨拶を送ります。それから、わたしの同胞であるルキオスとヤソンとソシパトロスもまた。22 主にあってこの手紙を口述筆記したわたしテルティオスがあなたがたに挨拶を申し上げます。23 わたしと当地の教会全体に宿を提供してくれている家の主人ガイオス<sup>386</sup>が、あなたがたに挨拶を送ります。当市の会計係エラストスと兄弟クアルトスが挨拶を送ります<sup>387</sup>。

---

つまり、「混じり気がない」さまを言う。「純真」としているのは、青野訳。なお、「善に対しては賢く、悪に対しては純真であってほしい」については、1コリント14：20「兄弟のみなさん、あなたがたは、判断力では子どもになってはいけません。むしろ悪では幼子となり、判断力では成人した大人になりなさい」、参照。

<sup>383</sup> サタンが足の下で踏み砕かれるだろうという期待は、神に敵対する天使的な力が最終的に打ち負かされることに対するより大きな終末論的な待望の一部分と考えられる。背景として、まずは創世記3：15の影響があるが、マラキ3：21「わたしが備えているその日に、あなたたちは神に逆らう者を踏みつける。彼らは足の下で灰になる、と万軍の主は言われる」を、参照。他に、ヨベル5：6, 10：7, 11；23：29；1エノク10：4, 11～12；13：1～2；2エノク7：1など、参照。cf. Dunn, op. cit. p. 905.

<sup>384</sup> 1テサロニケ5：28, 2テサロニケ3：18, さらに、ローマ1：7, 1コリント16：23, 参照。

<sup>385</sup> 使徒言行録16：1～3, 17：14, 18：5, 19：22, 20：4, パウロでは、1コリント4：17, 16：10, 2コリント1：1, 19；フィリピ1：1, 2：19, 1テサロニケ1：1, 3：2, 6；フィレモン1, 参照。

<sup>386</sup> 1コリント1：14にクリスポスと並んでパウロ自身が洗礼を授けた男として登場するガイオスと同一人物か。彼はコリントの教会で指導的役割を果たしていた。使徒言行録18：7では、ティティウス・ユストゥスという名で言及されている。

<sup>387</sup> これに続く部分に、ネストレーア—ラント27版本文には採用されなかった異読（24節）があり、本文批評上の写本に関する比較資料欄（critical apparatus）に、載っている。新共同訳では、本文完結後に、本文とは区別して、「底本に節が欠けている箇所（の異本による訳文）」として、「わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同と共にあるように」という訳文が記載されている。

## 〈神への賛美〉

[25 わたしの福音, すなわち, イエス・キリストについての宣教<sup>388</sup> によって, 世々にわたって<sup>389</sup> 秘められてきた神秘の啓示によって<sup>390</sup>, あなたがたを強めてくださる方に, 26—その神秘が今や, しかし, 預言的書物をとおして明らかにされ, 永遠の神の命令にしたがって信仰の従順に導くべくすべての異邦人に向けて宣言されたのです—27 この, 知恵ある唯一の神に, イエス・キリストをとおして, 栄光が世々限りなく<sup>391</sup> (ありますように), アーメン。]<sup>392</sup>

<sup>388</sup> 「イエス・キリストについての宣教」は, to kērygma Iēsou Christou。直訳すると「イエス・キリストの宣教」。「イエス・キリストの」は目的格的属格と解するのが妥当であろう。

<sup>389</sup> 「世々にわたって」は, chronois aiōniois。分かりやすく言い換えれば, 「永遠の昔から」「初めから今に至るまで」。

<sup>390</sup> 1:17, ガラテヤ1:12, 16, 参照。さらに, 11:25, 1コリント4:1も参照。

<sup>391</sup> 「世々限りなく」は, eis tous aiōnas。分かりやすく言い換えれば, 「未来永劫にわたって」, 「永久に, とこしえに」。

<sup>392</sup> この25~27節は, 古ラテン語訳を前提とする後代の付加と言われる。この荘重な頌栄は, パウロの福音および福音宣教の総括的な内容のゆえに, この手紙の最後を飾るにふさわしいものとして, 有力な写本群によって伝承されてきた。